

にかほ市 食農セミナー  
象潟公民館 2階ホール  
2025年11月16日

---

# 地域を守る慣行農業、地域を作る有機農業

## ～2つの農業が地域の未来を支えていく～

谷口吉光  
(秋田県立大学)

# 簡単に自己紹介

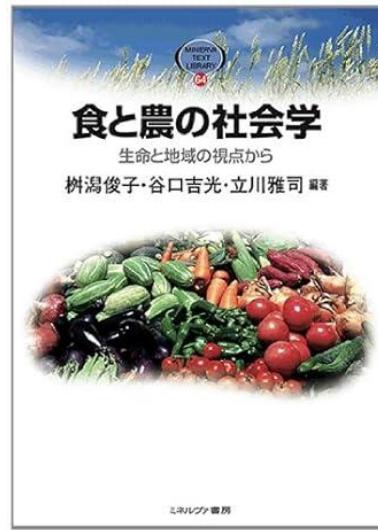
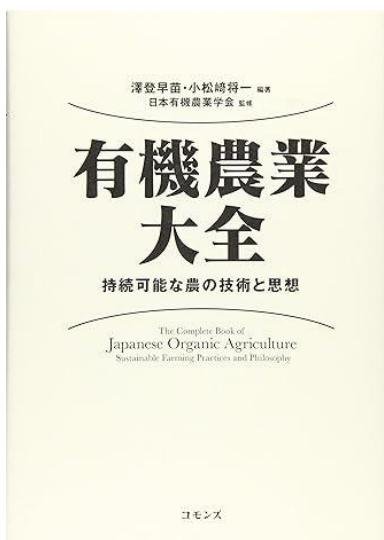
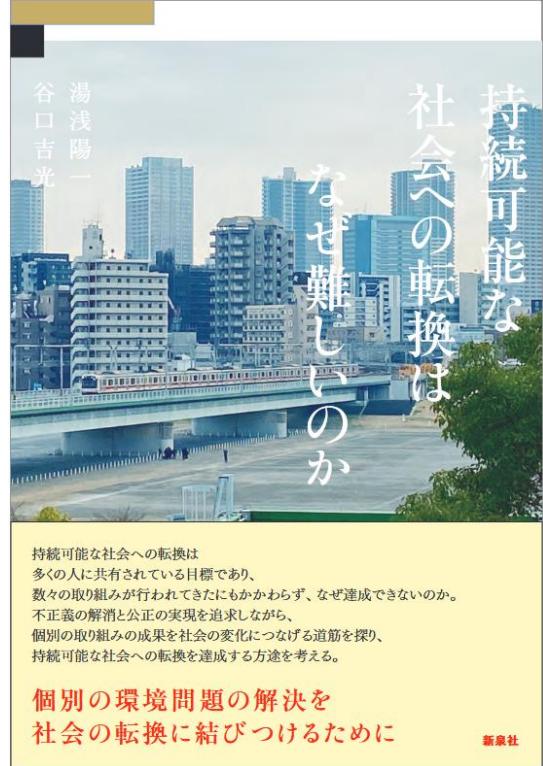
---

- 社会学者、市民運動家。1956年 東京都生まれ 69歳
- 上智大学文学部フランス文学科卒業
- 会社勤めを経て、上智大学文学部社会学科学士入学
- その後大学院に進む。28歳の時、有機農業と産直(産消提携)と出会い、研究を始める。
- 以来、社会学の視点から、有機農業の研究を40年続ける。

# 簡単に自己紹介 (続き)

---

- 1991年 秋田県立農業短期大学講師
- 2007～23年 秋田県立大学地域連携・研究推進センター教授。
- 2024年3月定年退職。現在は名誉教授。
- 専門は環境社会学、食と農の社会学、有機農業研究  
農、食、環境の問題の解決に地域の人々と取り組んできた。
- 2017～19年 環境社会学会会長
- 2020年～23年 日本有機農業学会会長



# 社会学のものの見方

---

- 社会学者はひとりひとりの人間に注目する。
- 「なぜこの人はこんなことをするのだろうか」といつも考えている。
- 人間を動かすものは大きく2つある。
- その人の考え方（価値観）
- その人が置かれている状況や立場

# 考え方の違いが見えない壁を作る

慣行農家  
農薬や化学肥料を  
普通に使う



有機農家  
農薬や化学肥料を  
使わない



# 立場の違いが見えない壁を作る

公務員

職務によって動く  
異動がある



壁

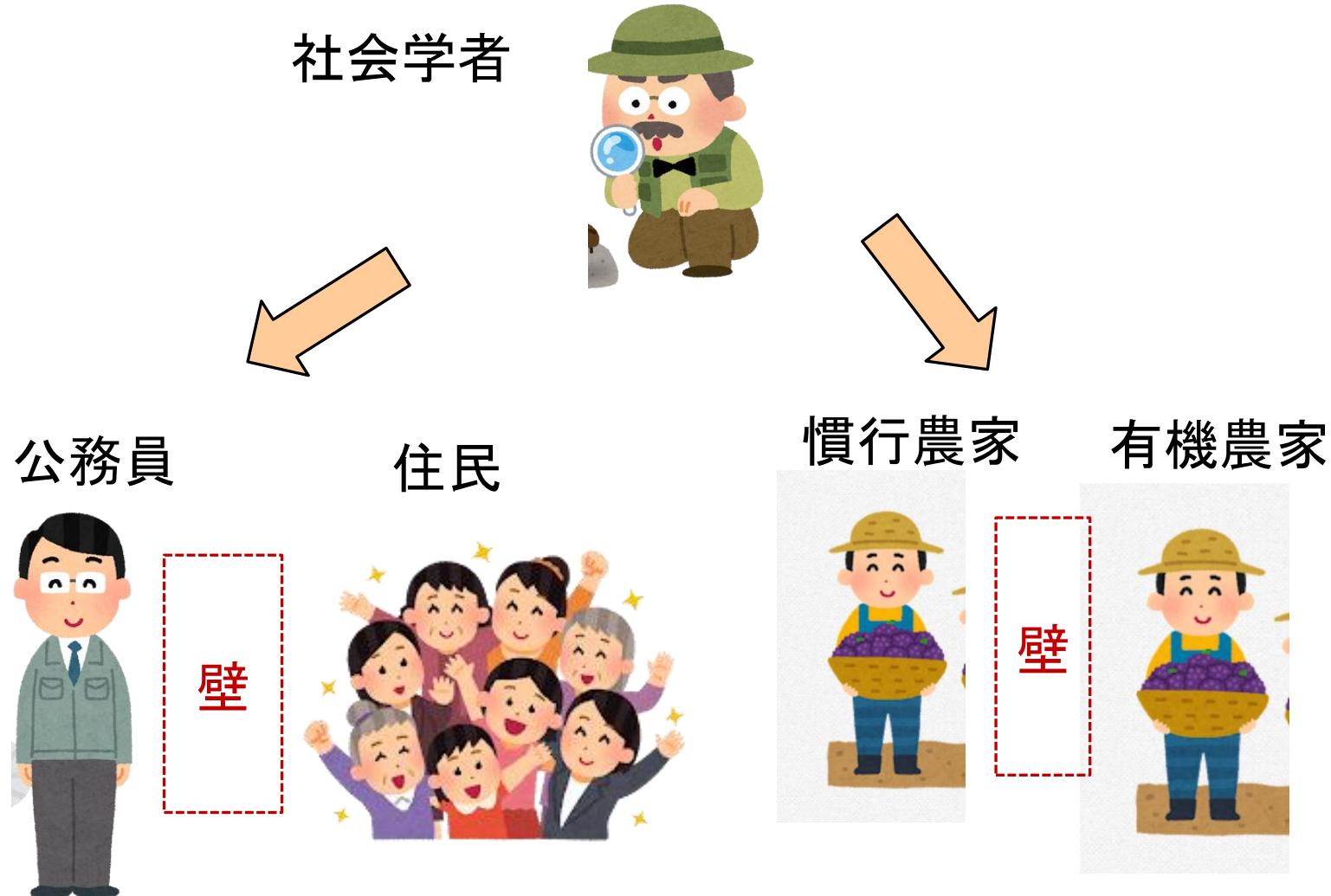
住民

それぞれの要望を  
かなえてほしい



壁の存在に気づかない、知らない人が多い。

# 社会学のメガネをかけると 人の関係と壁が見えるようになる



# 私の考え方

---

- 有機農業が地域に広がらないのは、人々の考え方の違いや壁があるからだ。
  
- 考え方の違いをうまく乗り越え、壁をうまく乗り越えることができれば有機農業は広がっていくはずだ。

# 講演のテーマ

---

「慣行農家と有機農家の間にある壁」を  
どう乗り越えるか

# 慣行農業と有機農業はなぜ対立するか？

---

- 慣行農業と有機農業が対立するのは当たり前。
- 慣行農業は人間や自然に多くの被害を与えてきた。  
例：農薬による農家の健康被害、化学肥料による地下水汚染、食品への農薬残留、生態系攪乱、環境ホルモン、子どもの発達障害への影響など
- 有機農業は慣行農業を批判して、それを乗り越えようとして生まれた運動だった。
- 有機農業は慣行農業を批判するところから始まり、慣行農業との対立のなかで発展してきた。

# 慣行農業と有機農業はなぜ対立するか？

- 一方で、慣行農家は、自分を批判する有機農家を嫌い、「非科学的」「変わり者」「異端児」とレッテルを貼って、認めようとしなかった。
- 1970年代の大学では「有機農業などは時代錯誤もはなはだしく、非科学的領域にうつつをぬかすとは研究者としてあるまじきことと酷評された」（保田茂）。
- こうした対立は50年続いてきた。慣行と有機は相容れないという考え方が常識になっている。これが「壁」を作っている。

参考文献：谷口吉光「なぜ有機農業は広がらないのか」湯浅・谷口編著『持続可能な社会への転換はなぜ難しいのか』(新泉社、2025)

# みどり戦略の衝撃

---

- 2021年1月、農林水産省がみどり戦略を発表した。
  - ・農林水産業のCO<sub>2</sub>排出量実質ゼロ
  - ・化学合成農薬の使用量50%削減
  - ・化学肥料の使用量30%削減
  - ・有機農業を100万ha(全農地の25%)に拡大
- これまでの農業の常識を根底からくつがえす内容  
農水省は「きちんとした農産物を育てるには化学肥料や農薬が必要だ」「農薬は使い方を間違えなければ安全だ」と指導してきた。
- 全国の農業関係者は大きな衝撃を受けただろう。

# みどり戦略が突きつける難問

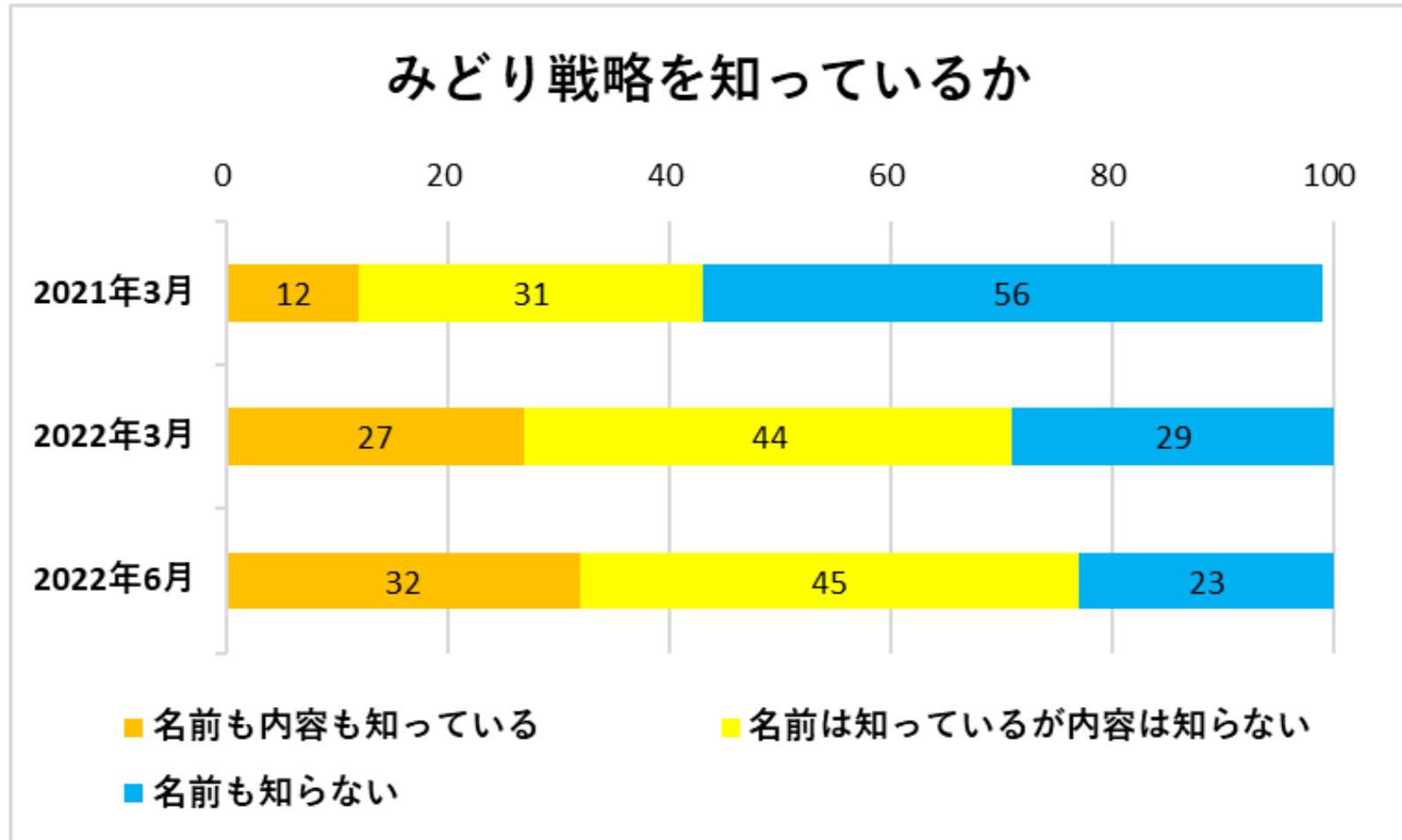
- 農薬や化学肥料を大幅に減らすためには、慣行農業の栽培体系を根本的に変える必要がある。
- 先進県は積極的に動いている。  
例：兵庫県、滋賀県、茨城県など
- 反面、慣行栽培に安住してきた地域は動きが鈍い。



<https://yumetajima.jp/y2015/12107>

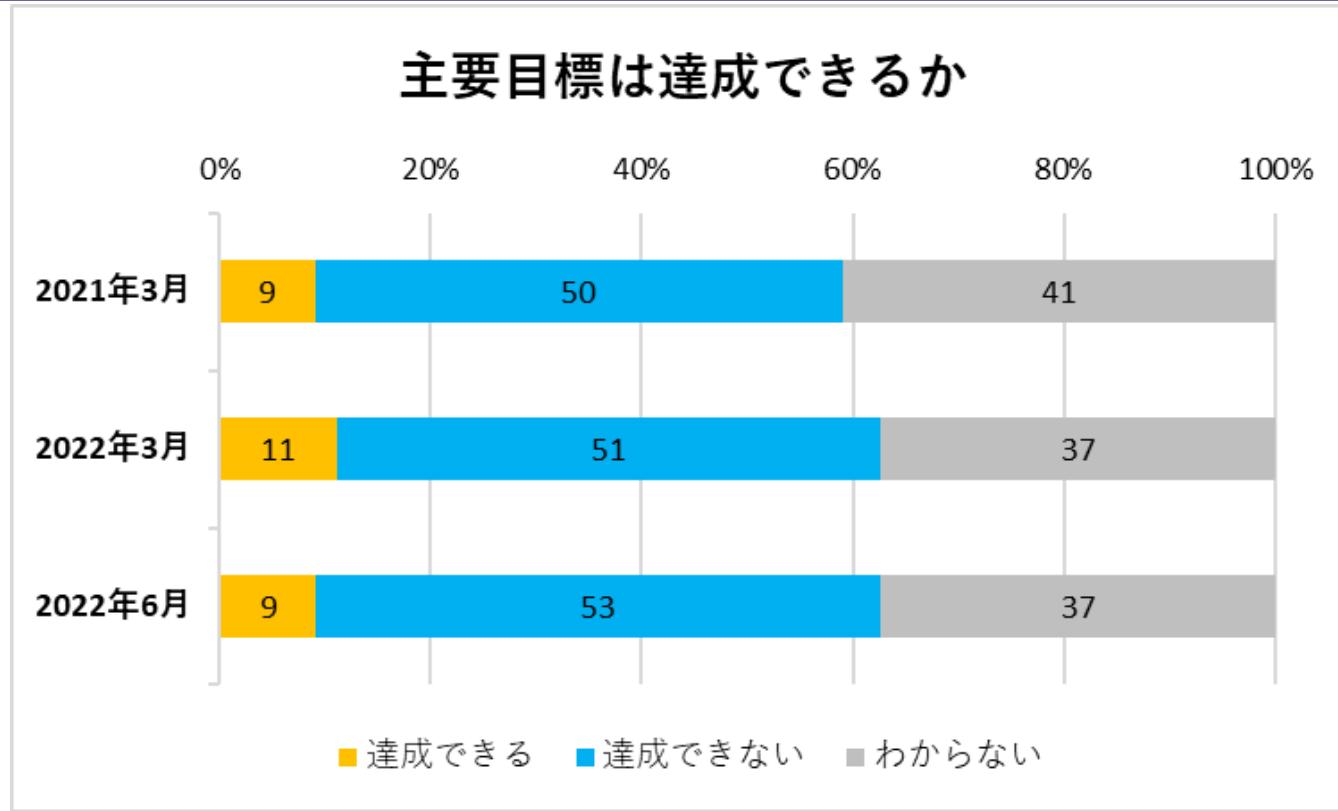


# 慣行農家はみどり戦略をどう見ているか？



(出典) 日本農業新聞農政モニター調査結果から筆者作成

# 「目標は達成できる」という意見は10%未満



(出典) 日本農業新聞農政モニターアンケート結果から筆者作成

- 認知度は上がったが、「達成できる」という意見は10%未満のまま。この冷ややかな態度の原因は何か？

# 転換参入の難しさ

---

- 有機農業を始めるには2つのタイプがある。

新規参入：非農家が新たに有機農業を始めること

転換参入：慣行農家が有機農業を始めること

- 新規参入に比べて転換参入は難しいといわれてきた。慣行農業の常識が邪魔をするから。

# 千葉県いすみ市の例

## □ 太田洋いすみ市長とのインタビューより



市長：（平成23年に有機農業を始めたんですが）その時に思ったことは、農家と多分一大戦争が起こるだろうと。

なんで今更有機農業をやるんだと。今更有機農業をやったって、どうにもならないじゃないかと。

お前は俺たち農家をつぶす気かと、そういう話になるんじゃないかと思いまして、躊躇したんですよね。

（出典）谷口吉光「有機農業、給食、生物多様性が共鳴する『自然と共生する里づくり』」、谷口編著『有機農業はこうして広がった』、コモンズ、2023年：50ページ。

# 慣行農家の気持ちを想像する

- (1) 慣行農業の何が悪いのかわからない。
- (2) 有機農業は慣行農業の常識から違いすぎて理解できない。
- (3) 有機農業で作物が育つ仕組み（メカニズム）がわからない。
- (4) 有機農業に対する先入観から抜けられない。
- (5) 有機農業で本当に経営できるのか。
- (6) 病害虫の被害が出たらどうするのか。
- (7) 関心はあるが、行政もJAも冷ややか。
- (8) 関心はあるが、何から始めていいのかわからない。
- (9) 指導者がいない。

考え方  
の問題

対策の  
問題

# 考え方の問題

---

- (1) 慣行農業の何が悪いのかわからない。  
→ 「**国の基準を守って使っていれば、農薬や化学肥料だって問題はないはずだ**」
- (2) 有機農業は慣行農業と違いすぎて理解できない。  
→ 「**有機農業は虫を増やし、草を増やし、菌を増やす技術です**」（館野廣幸さん）と言われても…

# 考え方の問題

---

- (3) 有機農業で作物が育つ仕組みがわからない。  
→ 「農薬や化学肥料を使わずに、どうして作物が穫れるのか」
- (4) 有機農業に対する先入観から抜けられない。  
→ 「草だらけ」「病害虫の巣」「儲からない」「大変」「宗教」…
- (5) 有機農業で本当に経営できるのか。  
→ 「買ってくれる人がいるのか」「本当に食べていけるのか」

# 対策の問題

---

- (6) 病害虫の被害が出たらどうするのか。  
→ 「病害虫が出たらどう防ぐのか」「減収しても補償がない」
- (7) 関心はあるが、行政もJAも冷ややか。  
→ 「『有機農業の指導はできない』と言われた」
- (8) 関心はあるが、何から始めていいのかわからない。  
→ 「慣行から有機への転換プログラムがほしい」
- (9) 指導者がいない。  
→ 「教えてくれる人がいない」「相談できる仲間がない」

# 慣行農家が有機に取り組むための条件

---

- 「有機農業は販路と技術があれば広がる」というのが農水省の考え方である。

販路（買ってくれる消費者がいること）

技術（立派な農産物を安定生産する技術があること）

- しかし、それだけでは足りないのではないか？
- 地域における慣行農家との共存、慣行農家と有機農家が一緒に取り組める事業、給食への農産物の供給などを考えてみてはどうだろうか？

# 慣行農業と有機農業はなぜ対立するか？

---

- 一方で、慣行農家は、自分を批判する有機農家を嫌い、「非科学的」「変わり者」「異端児」とレッテルを貼って、認めようとしなかった。
- 1970年代の大学では「有機農業などは時代錯誤もはなはだしく、非科学的領域にうつつをぬかすとは研究者としてあるまじきことと酷評された」（保田茂）。
- こうした対立は50年続いてきた。慣行と有機は相容れないという考え方が常識になっている。これが「壁」を作っている。

# 慣行農家と有機農家は助け合える

---

- しかし、私が見るところ、慣行農業と有機農業は補完的な（＝補い合える）関係になっている。
- 慣行農家の強み：農業生産の基礎技術、土地改良や水利の知識、地域農業を守る知恵、行政やJAとのつきあい方などをよく知っている。
- 有機農家の強み：有機栽培の技術、食の安全性や環境への意識、消費者との交流、SNSの活用法などの経験が豊富。

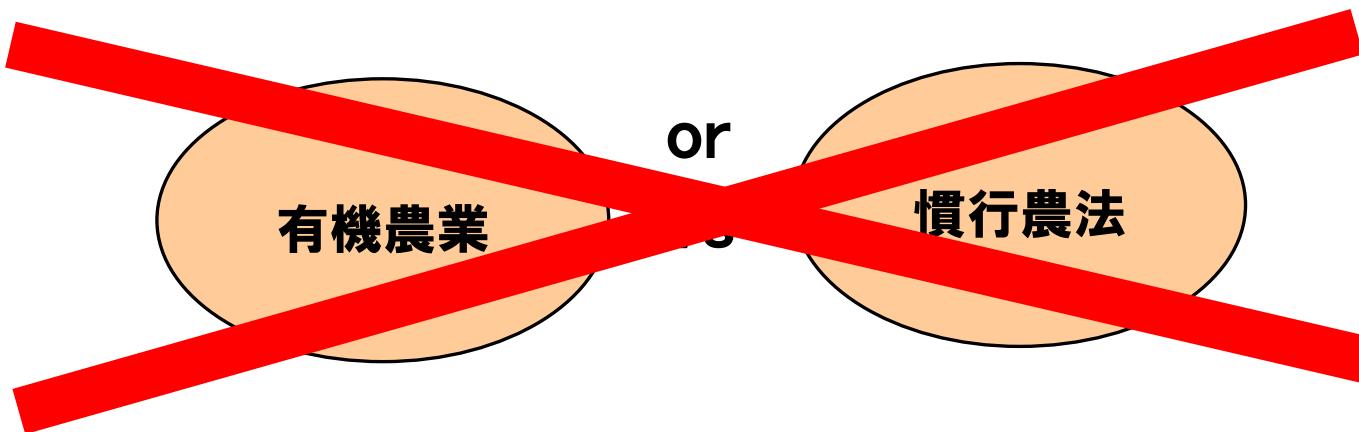
慣行農家と有機農家は助け合える面がたくさんある。  
対立を止めて、仲良くすべきである。

# 地域における有機農家と慣行農家の共存を

---

- 「オーガニックビレッジ事業」は首長が「うちの町で有機農業を推進する」と言えば導入できる。
- しかし、慣行農家は喜んで受け入れるだろうか。
- 逆に、いすみ市のように、「慣行栽培はまちがっていたというのか」と反発して、有機農業を敵視するおそれはないだろうか。
- 対立を避けるためには、首長が「この地域には慣行農業も有機農業もみんな必要だ。一緒に地域農業を支えていってほしい」と、多様な農法の共存共栄を推進する方針を打ち出すことが必要だろう。

有機農業か慣行農法かと対立的にとらえない



# 有機農業と自然農法

---

有機農業

自然農法

無農薬

無化学肥料

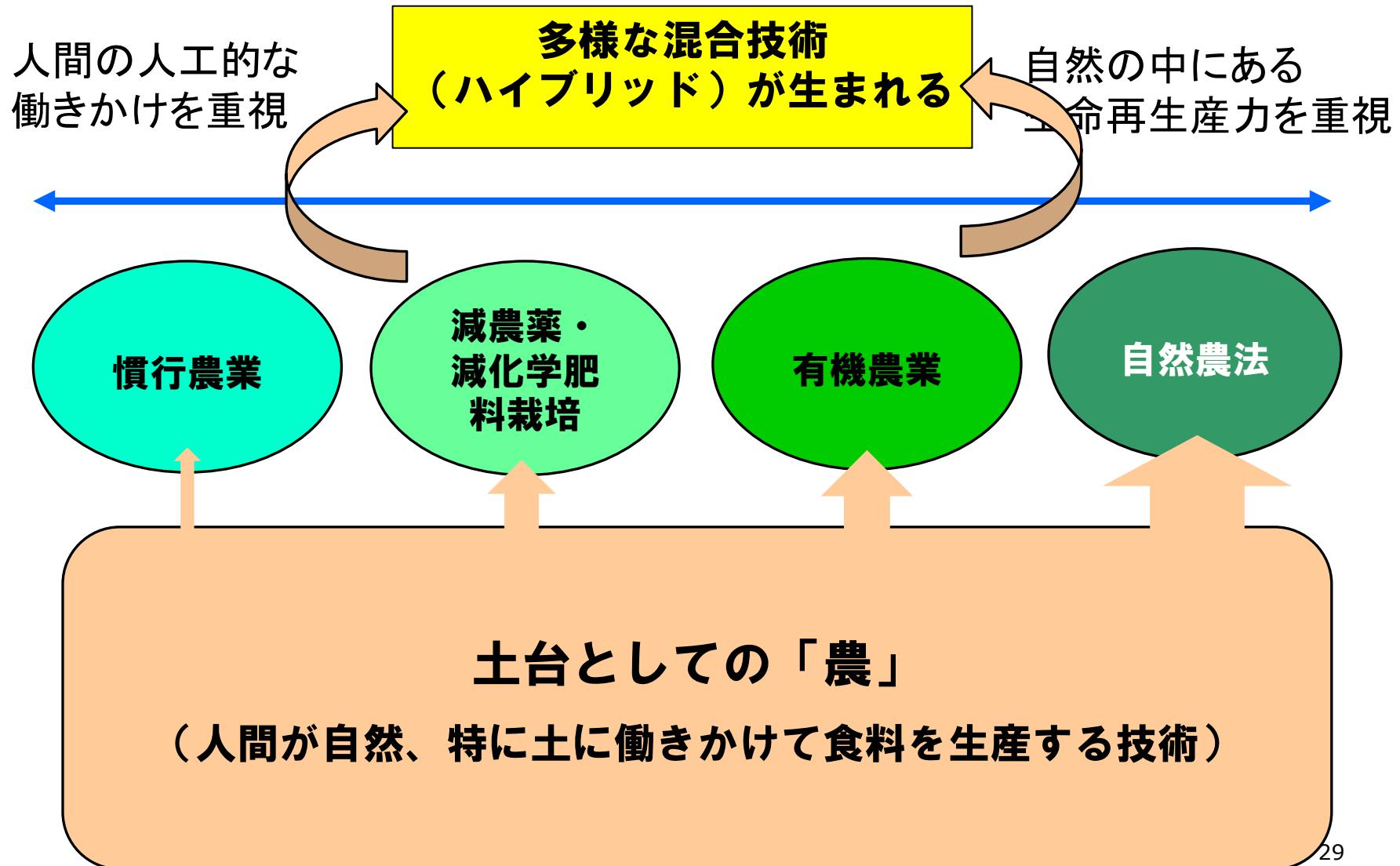
無農薬

無肥料

無除草

不耕起

# 自然共生型農業にはいろいろなタイプがある



# まとめ

---

- 慣行農業はどんどん時代遅れになる。「勇気」をもって「有機」農業に取り組む必要がある。
- しかし、慣行農家は有機農業に転換する準備ができていない。減収リスクへの対応など、きめ細かいサポートを提供する必要がある。
- 有機農業を地域に広げるには、有機農家と慣行農家が助け合い、ともに地域農業を支えるという意識づけが不可欠である。

# 参考文献

- 桝渕俊子, 2019, 「持続可能な本来農業に向けた歩み」, 澤登早苗・小松崎将一編著『有機農業大全』, 18–22.
- 日本有機農業学会, 2021, 「「みどりの食料システム戦略」に言及されている有機農業拡大の数値目標実現に対する提言書」.
- 大江正章, 2015, 「中山間地域こそ有機農業:島根県を事例に」『有機農業研究』, 7(2): 4–7.
- 関根佳恵, 2021, 「小規模・家族農業の優位性:新たな経営指標の構築と農政転換」『有機農業研究』, 13(2): 39–48.
- 谷口吉光, 2021a, 「有機農業を軸として日本農業全体を持続可能な方向に転換する」『日本農業年報』66: 263–275.
- 谷口吉光, 2021b, 「コロナ後の有機農業研究を考える:みどりの食料システム戦略を契機として」, 『有機農業研究』, 13(1): 2–3.
- 谷口吉光, 2021c, 「持続可能な社会への転換と有機農業」『季刊農業と経済』2021年夏号: 236–244.
- 谷口信和東京大学名誉教授との対談, 2021.6.18.【シリーズ: みどり戦略を考える】農業協同組合新聞  
(<https://www.jacom.or.jp/nousei/rensei/2021/06/210618-52087.php>)
- 谷口吉光, 2021d, 「農と食をめぐるパンデミック500日」, 『世界』10月号: 229–238.
- 谷口吉光, 2022a, 「第208回国会 衆議院農林水産委員会 参考人質疑資料」.
- 谷口吉光, 2022b, 「動き出すみどり戦略」, 秋田さきがけ新聞に5回連載(ネット閲覧可).
- 谷口吉光, 2022c, 「『みどりの食料システム戦略』にどう対応するべきか」, 『農業および園芸』97(1): 39–43.
- 谷口吉光, 2022d, 「『有機農業のパラダイム』とみどりの食料システム戦略の行方」『生活協同組合研究』, Vol.554, 2022年3月号: 37–44.
- 谷口吉光, 2022e, 「巻頭言 動き出すみどり戦略: 今後の動向と現場の課題」, 『有機農業研究』, 14(1): 2–3.
- 谷口吉光, 関根佳恵, 吉野隆子, 安井孝, 鮫田晋, 2022f, 「特集 今なぜ、有機学校給食なのか」, 『有機農業研究』, 14(1): 4–34.
- 谷口吉光, 2022g, 「レイチェル・カーソンの『沈黙の春』から60年:『みどり戦略』で『持続可能な社会』を目指すには」, 生活クラブ生協オリジナルレポート(<https://seikatsuclub.coop/news/detail.html?NTC=1000001957>)
- 谷口吉光, 2022h, 「求められる有機農業の再定義: ポイントはすべての生き物を生かし, 増やすことにある」, 生活クラブ生協オリジナルレポート(<https://seikatsuclub.coop/news/detail.html?NTC=1000001958>)
- 谷口吉光(編著), 2023a, 『有機農業はこうして広がった: 人から地域へ, 地域から自治体へ』, コモンズ.
- 谷口吉光, 2023b, 「みどりの食料システム戦略は農業をどう変えるか」, 関根佳恵編著『ほんとうのサステナビリティってなに?』, 農文協, 144–145.
- 谷口吉光, 2023c, 「有機農業に転換するには何が必要か」『第27回セミナー配布資料』, 有機農業参入促進協議会.
- 谷口吉光, 2023d, 「有機農業」, 環境社会学会編『環境社会学事典』, 丸善: 504~5.
- 谷口吉光, 近刊, 「農政における有機農業の位置づけの変遷から見る日本の農業環境政策の問題点」, 『農業市場研究』.
- 霽理恵子・谷口吉光(編著), 2023, 『有機給食スタートブック』, 農文協.

ご清聴ありがとうございました。

谷口吉光  
著

人から地域へ  
地域から  
自治体へ

# 有機農業は こうして 広がつた

1人が始めた取り組みが地域に大きく広がるまで  
そのターニングポイントや背景に迫る

## 有機農業の まちはどうやって 生まれたのか？

有機農業  
運動の歩み  
コモンズ

千葉県・いすみ市  
群馬県・白川町  
山形県・高畠町  
大分県・臼杵市

# 有機給食(オーガニック給食)

- 学校・幼稚園・保育園の給食に地元産の有機農産物を使う有機給食（オーガニック給食）が全国で注目されている。



鶴理恵子・谷口吉光編著『有機給食スタートブック』<sup>33</sup>  
農文協 (2023年4月出版予定)

# 有機給食を通した有機農業の振興を

---

- 市町村が給食で使う有機野菜、米、果物などを、農家が再 生産できる価格で全量買い上げる。
- 農家にとっては、有機農産物を地元で着実に販売していく 「新しい販路」である。
- 給食を食べる子供たちが未来の有機農産物の消費者になる。 また、子どもに影響されて親たちも有機への関心を高める。
- 給食費と有機農産物の価格の差は行政が補填すればよい。
- 農水省の「オーガニックビレッジ」事業には、有機給食の 導入が盛り込まれている。